
ある少年と連れの話～人売りと木こりと

古川まこと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある少年と連れの話〜人売りと木こりと

【Nコード】

N8761C

【作者名】

古川まこと

【あらすじ】

旅をしている2人の話です。会話中心の文です。

「やあやあ、済まないね旅人さん」

「いいや、別に」

「そうそう、ヨウは報奨金がもらえればそれで十分なんだもの」

「うるさい。お前は黙ってる」

「は？ なんだよ。さっき私をだまして囿にしたのはどこのだれだ？ 何にも言わずにあんなことするなんてありえないだろ。本当に危なかったんだぞ！」

「そうか。命のありがたみを再確認できるいいチャンスだったな」

「お前な」

「まあまあ、カイさんも落ち着いて」

「ほら黙れってよ」

「お前もだ！」

「ま、まあまあ。お二人とも仲良くしてくださいな。お礼に今日はうちに泊まってってください。今夜は豪華に頂きましょう」

「野宿せずに済むな」

「野宿するつもりだったのか？」

「お前だけな。俺は宿の目途はもうついてた」

「は!？」

「お前と同じ宿なんて御免だからな。こつこつるさくちや寝れやしな
い」

「うるさくさせてるのはお前だろ!! 金がなくなったからって仲間を売る奴があるかよ?! 困にするにしても先に一言いつてくれれば」

「『先に言う』、か。なら昨日、賞金かった人売りが俺の寝首取りにきたのはなぜだ?」

「.....」

「なんで奴らは日中フードをかぶっていた俺の髪が赤いつて知っていた?」

「.....」

「誰かが俺をダシにして奴らをおびき寄せたと思えないよなあ?」

「.....」

「さて、あれは一体誰の仕業だ?」

「……………き、今日はもう疲れたし、夕飯頂いたらすぐ寝ようかな」

「誰の仕業だ」

「……………う、ごめん」

「お、お二人とも。まあまあ、ケンカするほど仲がいいとも言いますし。ひと先ず中に入りましょう。外も冷えてきてますし」

「は、はい」

「ふんっ」

*

暗く、月も星も見ることのできないそこで低く小さな声がいきかう。

ぼそぼそとくぐもるのは男たちの声。

手には皆物騒なものを手にし、黄ばんだ薄汚い歯をちらちら見せながらいやな笑いを浮かべていた。

「で、奴らは？」

「ぐっすりだ」

「だが運が良かったじゃねーか、あのまま小僧を追っていて。おかげで赤だけじゃなく水色の方も手に入る」

「そうだな」

「きつと奴ら高く売れるぞ」

「ああ。女じゃないのが残念だがな。水色の方は男にしては綺麗な顔してる。あれはあれで値がつくだろっさ」

声は3つ。だがそこに息を潜める者は合計5つ。

3つの声の中にはあの木こりのものもある。

「赤い方には気をつける。昨日の奴らを殺さずに役所に連れてつたのはあいつだ。多分水色の方が弱い。今日見ても逃げてるばかりだったからな」

「ははは。お前もつまよいな。昨日の仕返しに木こりに化けて。しかも奴らにここらの邪魔だった同業者片付けさせるなんてよ」

「商売敵をまんまと消したうえ、商品までまんまと袋のねずみか」

「ああ。だから売れた時の分け前、今回はちよいと俺だけあげてもらうぞ」

「へいへい」

「おい、ここのじじいはどうしたんだ？」

「ああ。あんな腐りかけ、売れもしないからそこら辺に捨ててやっ
たよ」

「へへ、なるほどなあ」

下品な笑いがその場に密集する。

木々のざわめきはそれらを消し去ってしまい、虫の音色は物音などないもののように響き渡る。5つの人影は握りしめた物騒なものをきらめかせ、物音もなくその小屋へと忍び込む。本来の主人を無くした小屋は、悲しみに声を上げたのかキシリとその柱を軋ませた。

入ってすぐに丸テーブルがあった。

その上にはびっしりと皿が並び、冷めて湯気の出ることのない残飯が並んでいた。

そして一つの扉。その横には階段があり、上にはもう一つ扉がある。一つの部屋に一人。ハズレの扉は存在しない事を男たちは知っている。

「下に二人、上に三人。いいな」

木こりに化けた男は、赤い髪の少年を上へ、水色の髪の少年を下へと振り分けた。それもこれも、上なら逃げ場も減ると考えたから。そして、下に宛がえた水色は、そうそう手が掛ることなくお縄につくと思っただから。

「よし、行け」

ガチャリ

ガチャリ

二つの戸が同時に鳴った。

「う、うわああああ！！！！」

「く、くそお！！」

そして上の部屋からは2人分の声が上がった。

だが物音はそれきりで、あつという間にあたりはひとたび前と同じ静けさに包まれた。

そしてしばらくして、一階の戸から現れた一つの水色。

「…誰が小僧だつづうの」

不満の声は静寂に溶けて消えた。

それに赤のこらえられたようなくつくつという笑いが続く。

*

「…ふたり」

「三人だ。俺の勝ちだな」

「何言つてんだよ。私は声を上げさせる前に捕まえたんだ。ここは引き分けだろ？」

「お前こそ何言つてんだ？　そもそもこいつら、お前がけしかけてきた時の余りなんだろ。だったらこの間の奴全員片したのは俺な訳だから、今の分を引き分けにしたとしても7人分の差があるわけだ。俺の勝ちだな」

「はあ……………。まだ昨日のこと根に持つてるのかよ」

「気に入らないならもう二度としない事だな」

「はいはい。悪かったですね。でもこの二日でかなり儲かったじゃないか。これでまた、当分は金銭の配しないで済むだろ？」

「そうだな。もしこれでまた困ったら、誰かさんに困ってもらうしかない。というか、そのまま売り飛ばしたほうがっとり早いのかもな」

「このひねくれ者」

「お前が言つな」

夜に寝静まる街中を、役所へ向かい五人の大人を引きづりながら言い合う二つの人影は、なんとも滑稽に月明かりに照らされていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8761c/>

ある少年と連れの話～人売りと木こりと

2010年10月21日22時48分発行